

『いやだいやだのスピunker』

ウィリアム・スタイグ 作 セーラー出版

『タオのプーさん』

ベンジャミン・ホフ 作 平河出版

『たくさんのふしぎ』

タイガー立石・絵と文 福音館 一九九四年一月

寺田 京

『いやだいやだのスピunker』

主人公スピunkerが、「誰ひとりわかってくれない」と沈黙の世界にはいりこみ、ハンモックのなかで思い悩み、最後に、ピエロ姿になってみんなを笑わせて、ほろ苦い心の葛藤からぬけだす。

スタイグが八十歳のときに書いた内面世界をテーマにした話である。

この話は、四つの点で興味深い。第一に、眉をしかめて目をつり上げたスピunkerの反抗的な自己主張の言動に、子どもが共感を感じるという意外性。第二に、内面の不安や動揺を宙ぶらりんの

ハンモックであらわす象徴性。第三に、大人と子どものかけひきの面白さ。次々と機嫌をとることばにたいして「今ごろ遅い―親切だな―きずつけておいて―世界中がさからうからさからう」というように意識がながれて、やっと「どうやってなかなかおりしようか」とめざめる。第四に、ユーモアあふれる解決策を子どもが自分で実行するというアイデア性。

子どもはワクワクしながら、こうした意識の流れを共有する。そして、ひとりて孤独と向かい合う意味をも感じとる。

大人が与える解決策は、本当のところ、子どもの内面にとどいていないかもしれないという危険性も伝わってくる。ごめんなきいだけでなく、心から愛し、理解している気持ちが伝わらないと、相手を動かすことができない一方通行のコミュニケーションになってしまう。

なによりも、時間が解決してくれるのだ。子どもの内なる力で。

『タオのプーさん』

なるほど、「プーさん」を読んだあとの、あのこちよさの秘密がわかった。プーさん独特の明るさ、落ちつき、ユーモアでものごとをプラス思考すると、すべてのことが最小限の骨折りでうまくいってしまうのである。

作者は、プーを通して老荘思想を解説する。そして、「ぼくたち、ひとりひとりに、えっへんフクロ、せかせかウサギ、くよくよイーヨー、プーがいる。しかし、先見の明さえあれば、プーの道を選ぶであろう」と指摘する。

プーの道とは、タオイズムの原理の一つであるあらき（プーすなわち彫られてない木の意味）の

性質が、単純、静か、自然、気取らないものを楽しむことであり、このような生来の力をもつ自然のままの状態や、穏やかな鏡のような心は、まさしくプーと一致するのである。また、カルストンパイは内なる自然をあらわすことや、無為、中和の道がプーの道だという。プーは、報酬を求めず、時間の節約を求めずにプロセスを楽しむ。内面が満ち足りた生き方なのだ。

澄みきった子どもの心で、オリジナルを生きることの大切さや、単純な心で生きる喜びを再確認することができる。自分を知り、認め、信頼し、楽しみ、あるがままの自分を役立てることの素晴らしさ。内なる声を聞くと、知恵と幸福と真実がおのずからあらわれるという。「始まりに帰れ。ふたたび子どもになれ」と。

『たくさんのふしぎ』

親子で絵を楽しめるインパクトの強い本である。

ゴッホ、シャガール、ピカソ、モジリアーニ、ムンク、エッシャー、マグリット、アルチンボイト、国芳などさまざまな画家の肖像画が登場して、人間の顔を美術の観点から学ぶことができ、生きている意味を表現する顔、こころの顔、にぎやかな顔、謎の顔、やわらかな顔、変な顔などが、ながめているだけでイメージネーションが湧いて、元気がでてくる。

幼いころであった絵の記憶は、魂のすてきな宝物となつていつまでも心をゆたかにしてくれるだろう。